

【資料紹介】 吉田茂宛竹内綱書簡

久保庭 萌（当館学芸員）

一 吉田家旧蔵資料と書簡の概要

本稿では、当館が所蔵する吉田茂関連資料のうち、吉田の実父竹内綱から吉田に送られた書簡二通を紹介する。当館所蔵の吉田宛竹内書簡は合計五通あるが、紙面の都合上すべてを掲載できなかったため、残り三通については別の機会に改めて紹介したい。

今回紹介する資料は元々吉田茂が所蔵していたものであり、吉田の没後に吉田健一が受け継いだ。二〇一七年に吉田家から吉田茂関連の資料を一括して寄贈いただき、現在整理を進めている。資料のなかには、吉田茂宛の書簡が三百通余り含まれており、吉田の行動や思考の一端を探る上でも貴重な資料といえる。なお、財団法人吉田茂記念事業財団（のち吉田茂国際基金）が刊行した『吉田茂書翰』（中央公論新社、一九九四）及び続刊の『吉田茂書翰 追補』（中央公論新社、二〇一一）には、吉田茂から差し出した書簡が合わせて一四〇四通収録されているが、他方吉田宛の書簡は、まとまった形では公開されていない。また、竹内綱宛吉田茂書簡は、書簡集にも収録がなく、今回紹介する竹内の書簡に対応する吉田の返書も、管見の限りでは発見できていない。

今回紹介する書簡はいずれも一九一五年に作成されたもので、吉田が安東領事と朝鮮総督府書記官を兼任していた時期にあたる。吉田は外交官として、一九〇七年に中国の奉天領事館に領事官補として赴任以来、一九一〇年代から二〇年代にかけて中国北部の領事及び総領事として、日本人居留民の保護や現地における情報収集などの業務に携わった。

一方、竹内綱（一八四〇～一九三三年）は土佐藩出身の自由民権運動家

で、一八九〇年の第一回衆議院議員総選挙に当選し、自由党土佐派の主要メンバーとして、衆議院議員を計三期務めた。竹内は政治家であると同時に実業家としての顔も持ち、グラバー商会からの支援を受けて同郷の後藤象二郎とともに現在の長崎県にあった高島炭鉱の経営に携わるなど様々な事業を手掛けた。また、今回紹介する書簡にもあるように、朝鮮半島の鉄道網敷設にも深く関わっていた。

竹内と吉田の関係、あるいは竹内家と吉田との関係は未だ明らかになっていない部分も多い^①。竹内の書簡は両者の関係を探る上でひとつの手がかりを与えるものである。

二 書簡の釈文と解説

【一】 吉田茂宛 竹内綱書簡（一九一五）年一〇月二八日付

此ノ手紙ハ去八日郵便発送致候積之處、机之引出ニ忘レ有之今日見出候ニ付、其俣郵便ニ付し申し候

念〔廿〕二日之手裏〔簡カ〕披見秋冷之好時節相揃安主之由拝賀之至二候、爰許一同万事省念可被致候、陳者京城之朝鮮鉄道一千哩記念ニ付総督より之案内且参列者之誘引も有之、明太郎よりも頻リニ被相進候へ共、自分ハ御祭騒キノ見物者好ましからず、別に北京行之企有之旁朝鮮行差控候事ニ致候、実ハ日支交渉結末以来日支親善之意見有之、秘密之同憂者ニ（牧野伊集院両氏ニも）相談致居申候而、目下北京当路者之内密を觀察為致申二有之候、其都合ニ依リ而ハ北京行ニ致積ニ有之候、自分之意見之緒言ノミ別紙之通ニ有之候、一覽之上意見有之候へハ内察被申越度候

廣事茨城之開墾地農業ニ従事為致積之處、本年押川光躬出京之節相続人之幼年ニ而家事之世話致候者無之ニ付、虎治を宿毛住ニ致候度相続有之ニ付、其後廣を宿毛住居ニ致し候、押川之養子（事故有之離縁）之次女を廣と結

婚致候筈相談相整、先月虎治廣同道宿毛ニ参り彌十二月十二日結婚之事ニ取極申候、宿毛ハ祖先墳墓之地邸宅も有之事ニ付、廣之住居与致候へハ至極安堵致候次第御座候

右申遣度草々不備

十月念〔廿〕八日 綱

茂殿

尚以虎治ハ廣伴ニ先日帰り十二月結婚之節再度宿毛行之筈、廣も宿毛屋敷ニ滞留致居申候也

【解説】

まず書簡の前半で述べられている「朝鮮鉄道一千哩記念」は、一九一五年に朝鮮総督府が開催した「始政五年記念朝鮮物産共進会」の行事のひとつである。朝鮮半島における鉄道網の敷設は、一八九四年に日本と朝鮮との間で締結された京釜及び京仁鉄道に関する暫定合同条款を嚆矢とする。日本は朝鮮半島での鉄道敷設権を徐々に獲得し、京仁線、京釜線、京義線などが敷設された。これらの鉄道網は一九〇六年に日本で鉄道国有化法が施行され、のちに朝鮮総督府が管轄する官営の朝鮮鉄道となった。

竹内は一八九五年、当時の首相であった伊藤博文に京釜京仁鉄道株式会社の設立趣意書を提出し、朝鮮半島における鉄道敷設の重要性を説いた。^②その後京釜線や京義線の敷設に携わり、京釜鉄道株式会社の常務も務めている。竹内が当時の朝鮮総督であった寺内正毅から記念行事への参加を求められたのは、こうした経緯からであろう。

文中で竹内は寺内からの招待を断り、別に北京行きを計画している。その目的のひとつが「日支交渉結末以来」北京における重要人物の偵察である。ここで登場する「日支交渉」とは一九一五年一〇月に書かれた内容であることを踏まえると、同年一月一八日、大隈重信内閣が中華民國の袁世

凱政権に対して提示した対華二十一条要求を指すと考えられる。前年夏に勃発した第一次世界大戦のさなか、日本はドイツと交戦し、ドイツの租借地であった膠州湾、青島、山東鉄道を占拠した。日本はこれらの山東権益の承認や、すでに日本の租借地となっていた南満州権益の租借期間延長、さらに中国政府における日本人顧問の設置などを中国に求めた。中国側は日本の要求に対し当初抵抗の姿勢を示したが、五月九日に一部の条項を除き要求を受諾した。しかしながら、これは、中国の対日感情を悪化させ、中国のナショナリズムを刺激する結果をもたらした。こうした状況下で、竹内は牧野伸顕や伊集院彦吉らと相談し、「北京当路者」の内情をさぐるべく中国行を検討していると書簡には書かれている。なお、北京の要人が誰を指すかは不明であるが、北京政府大統領であった袁ないし政府高官であったと考えられる。

ここで名前が登場する牧野は、一九一三から一四年まで第一次山本権兵衛内閣の外務大臣を務めており、対華二十一条要求を行った加藤高明外相の前任にあたる。さらに伊集院も一九〇八から一九一三年まで駐清・駐華公使を務めた。いずれもこの時期の対中外交に関係した人物である。この二人が対華二十一条要求で悪化した日中関係を憂慮していた様子がかがえる。なお、竹内と牧野は吉田と牧野の長女雪子の結婚（一九〇九年）により姻戚関係となったが、伊集院も牧野の義弟にあたり、竹内と伊集院は牧野の紹介で知り合ったようである。^③一九〇九年伊集院に宛てられた牧野の書簡で、竹内が清国を視察するので伊集院に竹内への便宜を図るよう牧野が依頼している。^④また、竹内の自伝にもこの時の清国外遊の記述があり、伊集院を通じて北京政府の高官と面会している旨が書かれている。^⑤

一方、この時期吉田は朝鮮総督府の書記官を安東領事と兼務しており、朝鮮総督であった寺内正毅とは密接な関係にあった。^⑥竹内の書簡の二カ月

前に吉田から寺内に送られた書簡^⑦には、「張〔錫鑾〕將軍及張〔元奇〕巡按使兩官二面談之砌日支關係の現状に顧ミ兩國政治家の往來意思疎通益々肝要之次第を説き、先づ今秋京城共進會を機會として寺内總督訪問之事を勸説」(○内は筆者注)とある。吉田は京城共進會(『始政五年記念朝鮮物産共進會』)の名目で、日中關係改善のため、寺内と北京政府側の高官とを引き合わせようとしていた。このように、吉田やその周囲で、当時急速に悪化しつつあった対中關係の改善に向けた動きがあったことが、これらの資料から読み取れる。

後半にかけて書かれているのは、竹内家の近況である。「廣事茨城之開墾地農業ニ従事為致積」とあるのは、竹内の七男廣のことで、廣が茨城県の開墾地で農業に従事するつもりであったところ、竹内の出身地である高知県宿毛の押川光躬(元自由民権運動家)の次女と結婚し、宿毛に居住することになったとある。廣に同行した人物の虎治は廣と同じく竹内綱の息子で、三男にあたる。なお、文中にでてくる「茨城之開墾地」だが、これは一九一三年に竹内綱・明太郎親子が中心となって開発した、牛久農場のことであろう。

【二】吉田茂宛 竹内綱書簡 (一九一五年) 年二月三〇日付

「封表」消印4. 12. 31 支那滿洲安東県日本領事館 吉田茂殿

「裏」東京市麻布区笄町百四十二番地 竹内綱 十二月卅日

本日廿日之書簡相達披見候、時下寒威日増難凌候處相揃健全抔喜之至二候、爰許一同平安省念可有之候

廣義去ル廿七日吉日二付、結婚式首尾能相濟候趣電信報知有之、大二御祝致候

陳者日支親善ニ付纔ニ意見之趣致承知候、右二付而者不捨置講究申上有之

候處、其許之意見ニ対し而者一見候處余程粗暴之考有之候、殊ニ相考當職之身分旁甚關心不少候ニ付而者教思付之俟左ニ申上候

帝政問題ニ付キ袁〔世凱〕ヲ助ケ我ニ帝政樹立之功ヲ収メ云々、右者支那ノ統一政治之速力ニ成立セシムヘキハ固ヨリ異議ナキモ、今日ニ於テ直チニ帝政ノ援助表榜セントスルハ頗ル考慮ヲ要スヘキ問題ニシテ容易ニ断スヘカラズ、抑支那之革命帝王ノ交代ハ殆ント普通ノ慣例ノ如キ觀アルモ国民ハ決し而之ヲ随喜スルモノニ非ス

君民間ニ於ケル正義ハ古ヨリ伯夷叔齊文天祥方孝孺ノ如キ大ニ尊崇セラレ、所ナリ、今日帝政再迭ニ於テ如何之結果〔果〕ヲ可見歟、逆睹スヘカラス、我ハ妄リニ国体ノ得失ニ就キ干涉スヘカラス、暫ラク国民一般ノ趨向ニ注意シテ其大勢ノ定マルヲ見テ之ニ援助スルモ決シテ遲キニ非ラルナリ、若シ然ラスシテ帝国ノ成り立ニヨリ大ニ騒乱ヲ来スカ如キアラ〔リ〕テハ危險甚シト云フヘキナリ

滿州ニ於ケル帝国ノ地位勢力ヲ強大ニシ北京之死命ヲ制スル云々右者日支親善協力一致シテ共存自衛東亞之平和ヲ維持セント欲セハ、威嚇手段ヲ以テ成效〔功〕セントスルハ大ナル誤謬ト言ハサルヲ得ズ、此ヲ列強ノ外交ニ見ヨ、露西亞ノ滿州鐵道大連旅順ノ租借、独乙ノカイゼルノ「トルコ」ニ於ケル懷柔策ヲ以テ今日ノ戦争ニ参加セシメシカ如キハ威嚇ヲ以テ得スルニ非ス、偶独乙ノ膠州灣租借ノ如キナキニ非サルモ之カ為メ英ノ威海衛仏ノ廣州灣ノ要求トナリ支那ヲシテ憤慨已ム能ハサラシム、此國際ノ正義ニ非ラルサルナリ、日本ノ國際ハ正義ヲ以テ終始不動ノ主義トナサ、ル可ラサルナリ

日支經濟關係云々ハ大体ニ於テ賛成ナリ、我國官民ハ商工農業其区々タル利権獲得ヲ放念シテ、支那製造原料ノ豊富労働者ノ勤勉労働ノ低廉ヲ利用シ、我ノ事業管理ノ經驗學理技術ト相待ツテ合弁事業ヲ經營セハ必スヤ成

効〔功〕ヲ期スヘキナリ

日支之国交ニ就キ切「希」〔抹消〕望スルハ第一支那駐在公使ハ日本第一流ノ外交家ニシテ支那「ノ」〔抹消〕文学言語ノ素養アツテ支那ノ事情ニ精通シ「スル者ニシテ」〔抹消〕支那人ト親密ノ交際ヲ為シ得ヘキ者タラサル可ラサル事トス、然ルニ從來支那駐在公使之其人不得而已ナラス今日ニ在ツテ朝野官民共多クハ其誠ニ支那之事情ニ精通スル者ニ無キハ遺憾之至ニ有之候、近來學者二者支那ニ対スル著述有之候ヘ共見ルヘキモノハ内藤佛次郎之支那論而已歟与者存候

十二月三〇日 綱

茂殿

筆ニ任セテ記シ候者ニ付雜読有之度候也

【解説】

この書簡は、前述の書簡【一】の約二か月後に竹内から吉田に送られた。冒頭では、一〇月時点で結婚予定と書かれていた竹内廣の結婚式が、つつがなく執り行われたと書かれている。

次に、竹内は「日支親善ニ付纔ニ意見之趣致承知候」と書いており、この書簡の前に、吉田が竹内に対し日中の親善についての意見を述べていたことがわかる。竹内は吉田の意見を「其許之意見ニ対し而者一見候処余程粗暴之考有之候」と吉田の意見のうち一見して、粗暴だと考えられるものもあるもので、「教思付之俟左ニ申上候」と、思いついたままを教え、以下のように申し上げると述べている。それ以降の文章は、吉田の意見を取り上げ、それに対して竹内が考えを述べる形式をとっている。

まず、最初の話題は「帝政問題ニ付キ袁（世凱）ヲ助ケ我ニ帝政樹立之功ヲ収メ云々」とあるように、袁世凱の帝政問題について論じている。

一九一五年末の段階で、袁は民政から帝政への転換を企図し、「皇帝」の地位に就任した直後だった。吉田が竹内に袁の援助をするよう意見している一方、竹内は袁の帝政への援助を標ぼうするのは「頗ル考慮ヲ要スヘキ問題ニシテ容易ニ断スヘカラズ」とあるように、慎重な態度をとっている。竹内は続けて、みだりに中国の国体の得失について干渉すべきではなく、しばらく中国の情勢を注視し、大勢が定まってから援助しても決して遅くはないと述べている。吉田が日本の中国への積極的な干渉を主張している一方で、竹内は内政干渉にあたる行為は慎むよう、慎重な立場をとっていることがうかがえる。なお、袁の帝政運動は各地の軍閥の抵抗に遭い、翌年三月には帝政の廃止に追い込まれた。同年六月に袁自身も急逝し、事態は急展開を迎えることとなる。

次いで、「満州ニ於ケル帝国ノ地位勢力ヲ強大ニシ北京之死命ヲ制スル云々」とあるのは、吉田が満洲における日本の地位勢力を強大にして、北京政府の急所を押えるなどとの意見を述べている部分である。これに対し竹内は「右者日支親善協力一致シテ共存自衛東亜之平和ヲ維持セント欲セハ、威嚇手段ヲ以テ成効〔功〕セントスルハ大ナル誤謬ト言ハサルヲ得ズ」、すなわち東アジアの平和を維持しようとするならば、武力的手段を用いて解決を図ろうとするのは大いなる間違いであると強い口調で吉田の意見を否定している。ここで竹内はヨーロッパ諸国の例を挙げ、対外交渉における外交的手段と武力的手段とを比較している。竹内は、イギリスやフランスの中国分割の状況をもって「此国際ノ正義ニ非ラサルナリ」と述べており、日本の外交（本文中では「国際」とある）は正義でもって始終不動の主義とするべきであると言っている。

一方、日中の経済関係については、吉田と竹内の意見は一致している。竹内は「日支経済関係云々ハ大体ニ於テ賛成ナリ」と述べており、竹内い

わく、中国製造原料の豊富さや、労働者の勤勉さ、賃金の低廉を利用し、日本の事業管理の経験、理論、技術をあわせて合併事業を経営すれば必ず成功するだろうとしている。また、竹内は日中の国交において、中国語や中国の文化に詳しく、中国の事情に精通している者で、中国人と親密な交際ができる日本の一流の外交家を中国駐在公使とすることが望ましいと説いている。

以上の内容からは、吉田が外交官として中国に赴任中、竹内と連絡を取り合い、意見を交わしていた様子がみてとれる。また、竹内と吉田の中国に対する姿勢は、経済面では一致していたが、他方中国の政治情勢に対する日本側の対応という点においては、意見を異にしていた。これは、中国を未だ大国とみなす竹内と、中国はすでに外部からの介入なしには統一しえないとする吉田の認識の違いに由来するものだといえるだろう⁽⁸⁾。

注

- (1) 吉田茂と竹内綱との関係については、代表的なものとしてジョン・ダワー『吉田茂とその時代』（中央公論社、一九九一）や猪木正道『評伝吉田茂1 青雲の巻』（筑摩書房、一九九五）、原彬久『吉田茂―尊皇の政治家―』（岩波書店、二〇〇五）に概説的に取り上げられている。また、竹内が吉田の思想に及ぼした影響については、中西寛『吉田茂のアジア観―近代日本外交のアポリアの構造―』（『国際政治』第一五一号、二〇〇八）に詳しい。中西は中国の大陸経営という点における竹内と吉田の思想の共通点を指摘しているが、竹内と吉田の直接的なやり取りを示す資料が乏しいため、竹内の自伝（『竹内綱自叙伝』吉野作蔵編『明治文化全集』第二二巻、日本評論社、一九二九）や『日本外交文書』（外務省）に収録されている吉田の電文などを援引し、

論を展開している。この他竹内と吉田の関連資料としては、竹内綱の長男明太郎の日記が高知工業高等学校同窓会編『工業ハ富国ノ基―竹内綱と明太郎の伝記―』（一九九七）に一部収録されており、日記には吉田が竹内綱や明太郎に自身の進路や養父吉田健三から引き継いだ事業の売却など種々の相談事をしていた記述がある。

- (2) 前掲「竹内綱自叙伝」及び朝鮮総督府鉄道局編『朝鮮鉄道史』第一巻（朝鮮総督府鉄道局、一九二九）。

- (3) 一九〇九年一月二九日伊集院彦吉宛牧野伸顕書簡（社団法人尚友倶楽部ほか編『伊集院彦吉関係文書』第一巻、芙蓉書房出版、一九九六）では、「竹内綱氏五月中旬御地へ到達之予定にて南清より旅行を始られ申候間、到達被致候はゞ何卒宜敷御世話被下候様奉願上候。清国には余程興味を有し高年に似合はぬ元氣有為之人に御坐候」とあり、牧野から伊集院に竹内を紹介している。

- (4) 前掲牧野伸顕書簡

- (5) 前掲「竹内綱自叙伝」

- (6) 吉田茂『回想十年（下）』（中央公論新社、一九九八（初出は一九五七―五八年）

- (7) 大正四年八月十日付寺内正毅宛吉田茂書簡（吉田茂記念事業財団編『吉田茂書翰』中央公論新社、一九九四）

- (8) 日本の対中政策に関する吉田の考えは、戸部良二「吉田茂と中国」（吉田茂記念事業財団編『人間吉田茂』中央公論社、一九九一）、佐藤元英「吉田茂の奉天総領事時代―対満蒙政策の思想と行動」（『近代日本の外交と軍事―権益擁護と侵略の構造―』吉川弘文館、二〇〇〇）や前述の中西論文などで詳しく論じられている。